東ドイツ（ゲーテ街道）を歩く　～近代ドイツの源流を求めて～

―◆―旅　程―◆―

［日　程］　2012.4.21（土）から 2012.4.28（土）まで

［行き先］　ベルリン、ポツダム、ライプチヒ、ワイマール、エアフルト、アイゼナハ

［行　程］

2012.4.21（土）
　移　動：関西国際空港（10：45 発）→ヘルシンキ・ヴァンター国際空港（15：00 着／17：00 発）→ベルリン・テーゲル国際空港（17：55 着）
　宿泊先：サヴォイ・ベルリン（ベルリン）

2012.4.22（日）
　観光地：ベルリン（ミッテ地区）、ポツダム
　宿泊先：サヴォイ・ベルリン（ベルリン）

2012.4.23（月）
　移　動：ベルリン・ツォーロジッッシャー駅（8：38 発）→ライプチヒ中央駅（10：06 着）
　観光地：ライプチヒ
　宿泊先：ノヴォテル・ライプチヒ（ライプチヒ）

2012.4.24（火）
　移　動：ライプチヒ中央駅（9：42 発）→ワイマール駅（10：58 着／15：17 発）→エアフルト中央駅（15：35 着／18：07 遅発）→ワイマール駅（18：24 遅着）
　観光地：ワイマール、エアフルト
　宿泊先：カイザリン・アウグスタ（ワイマール）

2012.4.25（水）
　移　動：ワイマール駅（8：41 発）→アイゼナハ中央駅（9：44 着／17：10 発）→ワイマール駅（18：17 着）
　観光地：アイゼナハ
　宿泊先：カイザリン・アウグスタ（ワイマール）

2012.4.26（木）
　移　動：ワイマール駅（9：59 発）→ベルリンシャルロッテンブルク駅（11：45 頃着）
　観光地：ベルリン（シャルロッテン宮殿、クーダム地区、ポツダム広場ほか）
　宿泊先：ベルリン・ウェスタン・カント（ベルリン）

2012.4.27（金）～28（土）
　移　動：ベルリン・テーゲル空港（12：10 発）→ヘルシンキ・ヴァンター国際空港（15：00 着／17：20 発）→関西国際空港（8：45 早着）
　観光地：ベルリン・テーゲル空港

—◆—旅行記（1）—◆—

［はじめに］

ドイツ語を勉強し始めたきっかけは、クラシック音楽に興味があり、ベートヴェンの第九を歌っていて、もう少しドイツ語を知って歌いたいと思ったからだ。ドイツに行ってみたいという意識は、それほどというか、全くなかった。2009 年の秋、甲南大学で社会人向けのドイツ語講座が開講されていることを知り、門をたたいた。春と秋に 10 回ずつ、つまり年に 20 回、1 回 90 分間の講座だ。

「A（アー）、B（ベー）、C（ツェー）」も分からない、数字の読み方も分からない、自己紹介の仕方も分からない、分かるのは第九の歌詞だけ。といっても、音として暗記しているだけのこと、本当にゼロからのスタートだった。

ところが、この講座は、2 年かけて 1 冊の教科書を進める形態で、わたしが入講した際は、その最終クールで、アルファベートや数字の学習はとうに済んでおり、「現在完了形」をマスターしましょうというところだった。先生は、「来春の講座に来ていただいたら、1 からですが、どうしますか？」と尋ねてくれたが、せっかく来たのだし、頑張ってみようと一大決心。もちろん、ちんぷんかんぷんだったが、周りの助けもあり、10 回の講座を終えることができた。

そのとき知り合った方が、ちょうどクリスマス時期のドイツを旅行され、お土産話とともに、素敵な写真を見せてくださり、「ドイツに行ってみたい！」という気持ちが、ふつふつと芽生え、その翌年、実際、現地に足を運ぶこととなるのだ。

前回のドイツ・オーストリア旅行の様子は、ホームページにも掲載しているので、ご興味のある方は、そちらをお読みいただければ幸いだ。

それから、1 年 4 か月。

甲南大学の社会人講座を続けながら、毎朝、ラジオ講座を聞き、ほんの少しだがドイツ語にふれ、次に行くことがあれば、もうちょっと話せるようにという思いで頑張ってきた。こんなに早く、その日が来ようとは。

ラジオ講座やテレビ講座で、ドイツやオーストリアの様子が紹介され、それを見ていると、「行きたい！」という思いが強くなり、ガイドブックを見ては、空想の世界で旅立っていた。今年は、「前へ！」という気持ちから、「行こう！」と決断した。決断したら、あとは早い。9 月ごろに行くつもりで計画していたのだが、どうも仕事の都合、雲行きが怪しく、「行かない、行けない」という選択肢はなかったので、調整の末、この時期に行くことにした。

職場の皆様をはじめ、ご迷惑をおかけした方々には、この場でお詫び申し上げたい。おかげで、このあと記すとおり、とても素晴らしく記憶に残る旅となった。

ドイツ語学習が、こんなにも楽しいものだということを教えてくださった甲南大学講師の先生がた、一緒に学び、そしてドイツやオーストリアといった国の魅力を教えてくれた仲間、その思いを胸に、ドイツへと飛び立った。どんな旅になったか、このあと綴っていきたい。

その前に、前回の旅は、初めての海外旅行だった。自慢にならないが、英語は話せないし、ドイツ語を勉強したと言っても、ほんの 1 年足らず。まともに旅を楽しめるはずがない。案の定、トラブルというか、いろいろな珍事が起き、苦労の絶えない旅だった。ツアーで行けば良かったのだが、諸般の事情で個人旅行となり、往復の航空券とホテルと主な都市を移動する鉄道切符のみ手配してもらい出かけたので、飛行機の搭乗や乗り継ぎ、ホテルのチェックイン、鉄道の乗車

開始や検札など、一つ一つに戸惑い、そして時間がかかった。

それでも、食べたり移動したりと、しなくてはならないことがあり、それに備え、気持ちが高ぶっていたのか、十分に睡眠もとれず、朝早くから布団の中で、辞書や会話集を開いていた。そんな中、日本語が通じず、テレビを付けてもドイツ語、町に出ればドイツ語、とドイツ語があふれている状況に嫌気がさし、「もうドイツ語の勉強はやめよう。」と決意したくらいだ。

ともあれ、訪ねた町での様々な出会いや素晴らしい景色景観が、その沈んだ気持ちに光を与えてくれ、無事に旅を終えることができた。

今回は、もう少し勉強もしているのだから、同じではいけないという気持ちと、もっと楽しみたいという気持ちで旅に臨んだ。今回の旅もツアーではなく、個人旅行だ。というより、ツアーで行くという選択肢はなかった。飛行機、ホテル、主な都市間の移動の鉄道と全て事前にインターネットで予約した。当然のことながら、予約サイトは全部ドイツ語だったので、分からない単語などは、辞書を引いて調べた。無謀と言われれば、無謀だ。

ガイドブックだけでは心もとないので、東京にあるドイツ観光局からパンフレットを取り寄せた。わたしは、観光局には日本人スタッフがいるものだと思っていたが、恐らくドイツ人だけで運営しているのだろう。送られてきたパンフレットの宛名が、独特な字体（とくに数字など）で日本人が書いたものではないと感じたのだ。わたしは、てっきり日本人スタッフがいるものと思い、パンフレットの依頼するにあたり、「拝啓　春暖の候・・・」と書をしたためたので、場違いも甚だしく、お恥ずかしい限りだ。にもかかわらず、「ドイツを訪ねようとしてくれて、ありがとう！」という気持ちがたっぷり詰まったパンフレットを受け取り、とても嬉しく感じたことを覚えている。

いよいよ楽しい旅の始まり。

前回の旅で達成できなかったこと、失敗したことを今回の旅では、成し遂げたいと思い、2 つの課題を自分に与えることにした。

1 つは、レストランなどでの支払いの際、スムーズにチップを渡すこと。

日本には、チップの文化がないので、とても難しい。少し多い目に渡して、「それで結構です。」という方法と、「いくらおつりをください。」という方法があり、どちらもできると良いな、と思っていた。前回は、うまく渡せず、それが嫌でレストランやカフェに入るのが億劫になっていた。

もう 1 つは、絵はがきを送ること。

旅先から絵はがきを送ることは好きで、国内に旅した際も、時間があれば誰かに送っているので、是非、チャレンジしたかった。前回は、時間以上に気持ちに余裕がなく、それどころではなかったので、とても残念に思っていた。

課題、達成なるか。そちらもお楽しみに。

では、本題へ進むこととしたい。

［1 日目（2012.4.21）］　ドイツ、そしてベルリンへ

ドイツ旅行の直前、4 月 19 日、20 日は、仕事で東京に出張だった。それゆえ、疲れて、良く眠れると思っていたが、ワクワクしてか、思うように眠れなかった。小さい子どもと同じである。

午前 5 時過ぎに起床。

妙にドキドキする。午前 6 時 30 分、最寄り駅発の列車に乗る。母が駅まで見送りに来てくれる。旅立ちというのは、なぜか寂しい。「行ってきます！」

午前 7 時 7 分、三ノ宮駅着。関西国際空港行のバス乗り場へ向かい、午前 7 時 20 分発の空港連絡バスに乗る。かなりの乗客で、補助椅子も利用し、車内は満席。およそ 1 時間で、関西国際空港に到着。出発便は、午前 10 時 45 分だが、搭乗手続きを行うため、チェックインカウンターＣへ向かう。バスに同乗していた人も数名いた。

今回の旅行で利用する航空会社は、「フィンランド航空」だ。海外旅行は、2 度目なので、初めてで当たり前。前回は、「エミレーツ航空」だった。いろいろと思いだすが、今回はどんなフライトになるのか、楽しみ。エルシンキ・ヴァンター国際空港で経由し、ベルリンへ向かうことになるが、乗り継ぎの待ち時間 2 時間を含め、所要時間は約 14 時間。一応、全行程、日本航空とのコードシェア便だ。

関西国際空港での搭乗手続きは、当然、日本人が対応してくれるので、とくに問題ない。荷物を預け、予約していた座席の搭乗券を受け取り、手荷物検査、出国手続きへと向かう。何でも、前回と比較してしまうが、とにかく人が多い。ゴールデンウィーク前に関わらず、こんなにも多いのかと驚く。ゴールデンウィークなどは、これに比にならない人出なのだろうが・・・。

手荷物検査というのは、何も悪いことをしていなくても緊張する。ひと通り検査を終え、次は出国審査。ここも、こわもての検査官が窓口にズラリ。前回は、深夜出発便だったため、わたしたちくらいしかいなかったが、長い列ができていた。その人の波に、出発前から酔ってしまう。午前 9 時から午前 10 時までは、出発便が最も多い時間帯なのだろう。

手続きを終え、搭乗ゲートへ向かう。北ウィングの 6 番ゲートだ。ウィングシャトルといって、国際線ゲートと手続き場を結ぶ新交通システムに乗る。ちなみに、このウィングシャトルは、鉄道ではなく、エレベータなどと同じ昇降機扱いということだ。意外！移動先は、端っこの方だったため、人も少なくなり、ほっと一息。気持ちを静めるためにも、コーヒーを飲むことにした。ちょうど、ルフトハンザ航空のボーイング 747-400 の大きな機体が、離陸に向け、ゲートを離れようとしていた。わたしたちは、後を追いかけて、ベルリンへ向かう。ルフトハンザ航空を見送ってから、わたしの母と、家内の御両親に電話をかけた。

しばらくして、搭乗ゲートに向かうと、フィンランド航空 AY078 便に搭乗する予定の人たちがロビーを埋めていた。ちなみに、AY078 便は、エアバス 330-300 という新しい機材で、中型機になるのだろう。座席数は 270 前後といったところだ。旅慣れた感じの人が多いのか、思い思いの時間をとてもくつろいで過ごしているように見受けられた。

午前 10 時 20 分、搭乗案内が始まる。チケットを手に機内へ、「Morning!」と声をかけられ、海外への第一歩という気持ちになった。

前回、利用したエミレーツ航空は、乗客の大半が日本人だったが、今回はそうでもなかった。また、

国際結婚が多いのか、そういうカップルやファミリーも見かけられ、違った様を垣間見ることができた。とりあえず、日本人乗客や日本人客室乗務員がいたので、ひと安心。

午前 10 時 45 分、定刻どおり、AY078 便は、関西国際空港を離陸。さっきまで胸騒ぎがしていたが、離陸と同時に腹をくくった感じ。楽しもう。座席の配列は、2-4-2 という配列なので、カップルは、たいてい隣り合わせで座れ、わたしたちもサイドの 2 人がけの座席で仲良くフライトを楽しむことができた。青で統一された座席カバーは心地よく、緑色の毛布と枕は肌触りが良く、快適に過ごせた。北欧の香りが、端々に感じてとれる。

1 時間半ほど過ぎたころに、昼食が配られる。フライト中の楽しみの一つだ。メイン料理は、「シーフードパスタ」と「チキンの甘酢あんかけ」だったが、座席が後方部だったため、有無を言わさず「チキンの甘酢あんかけ」となった。サイドメニューは、「茶そば」「パン」「白飯」「ピーチゼリー」「クラッカーとチーズ」だった。日本から乗せたので、日本食というわけだ。ドリンクは、ビールを頼んだ。こちらは、フィンランドのビールだった。家内もビールを頼んだが、飲まなかったので、都合 2 本飲むことに、ちょっと気も大きくなり、リラックスできた。ほどなく、睡魔が襲ってきたので、ウトウトと眠りにつく。飛行機は日本海を越え、ロシア国内へ差し掛かろうとしていた。日本時間で、午後 1 時前。離陸から 2 時間あまり。ここから、長いロシア上空の旅が始まる。

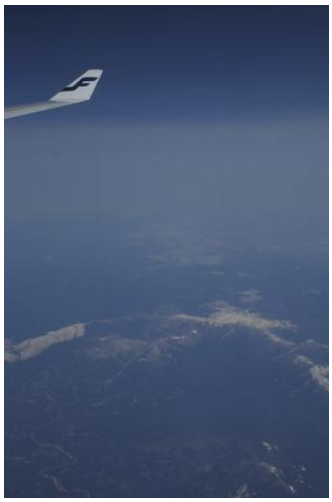
フィンランド航空は、ヘルシンキ到着まで、ほとんどロシア上空を飛行している。これには驚かされた。ロシアを良く「大国」と表現するが、雲の上からではあるが、その言葉の意味を実感することができた。そして、首都モスクワが、その国土のこんなにも西寄りにあったのだ、ということを知った。「ロシア」と良く言っているが、その内実―歴史や地理、文化など、関心がなかったと言ってしまえばそれまでだが、意外とベールに包まれている部分が多く、その一つ一つをはがしてみたい衝動にかられた。

そして、今回利用したフィンランド航空だが、「フィンランド」と言えば、「北欧の国」としてひとくくりにされがちで、こちらも詳しいことを知っている人は少ないのではないだろうか。「フィンランド」という国につても知りたくなった。旅の目的地ではないが、それぞれの通過点で、これほど魅力を感じさせられるのだから、旅は面白い。

フィンランド航空に乗って、もう一つ感心を持ったというか、興味深かったことは、「ユーロが使える！」ということだ。この便利さは、「通貨統一」というメリットの一つとして、よく語られてはいるが、こうやって旅に出ないと分からない。前回、エミレーツ航空でドイツへ行ったが、その際、ユーロは持っていたが、ドルは持っていなかった。そのため、機内はもちろん、乗り換え地のドバイでも、現金を使って何かを買うということは、気軽にできなかった。しかし今回は、機内でちょっと飲み物を買ったり、乗り継ぎの時間待ちのときに空港内の売店で、お土産を買ったり、手持ちの現金が使えたことは、たいへん有り難かった。

空港でお金を落とすことは、その地域の経済を潤すことにもなるわけで、通貨統一により、こういった手軽さから、空港で買い物をする人は増えたのではないだろうか。今、何かと話題のユーロだが、この利便性を味わうと、手放せないような気がしてならない。今後の行方が、違う意味で楽しみだ。そして、この「通貨統一」の経過やその時のことを、より知りたいという好奇心が、また芽生えてしまった。知りたいことだらけで、困ってしまう・・・。それだけ、物を知らないということなのだが・・・。

そういった意味でも、フィンランド航空は、とても快適で便利な航空会社だと感じた。ユーロ圏への旅であれば、お勧めだ。



そうこうしている間に、飛行機は到着まであと2時間となる。時計の針は、7時を指していた。日本時間の午後7時だ。座席前のディスプレイを見ると、スカンジナビア半島に差し掛かっていた。まだ、ロシア領内だ。

現地時間だと、午後1時なので、昼食に当たるのか、とにかく機内食が配られた。中身は、ハンバーグ、インゲン豆とキャベツの炒め物、スクランブルエッグ、ライス、ピーチゼリーだった。とても良い味付けで、って、日本で作ったものか・・・。目覚めに重い内容とも思えるが、とても美味しくいただけた。食事を終えると、もう間もなく飛行機は、フィンランドの首都ヘルシンキのヴァンター国際空港へ着陸する。

徐々に機体が高度を下げ、窓の外に、フィンランドの町並みが映しだされると、外国へ来たという実感がわく。現地時間は午後2時55分、予定どおり到着。機内から降りるため、身支度をしていると、前の座席の方が、わたしの出身大学の名前が入ったTシャツを着ておられたので、気になった。高揚した気持ちが、そうさせたのか、「Do you know ○○university？」と尋ねた。まぁ、なんと勇気のある行動！その後、話しを続けられるほどの語学力もないのに・・・。勢いよく返ってきた英語に驚きつつ、頑張って聞き取った（？）ところによると、「友達がその大学に在学中なので、日本を訪ね、Tシャツは、その友人からのプレゼント」ということだった（はず！）。「フィンランドは初めてか？」と尋ねられ、とりあえず、「Yes！」とは答えたものの・・・。旅の恥はかき捨て。とても笑顔で、喜んでいらしたので、良かったとしておこう。

余談だが、通路を挟んで隣あわせた日本人女性は、娘さんがフィンランドの方と結婚され、ヘルシンキに住んでおられるので、娘さんのお家を訪ねられるとか。その娘さんが、フィンランド航空で勤めておられるというから、また面白い。「素敵な航空会社で、気に入りました。とても快適なフライトだったと、娘さんにお伝えください。」と言って、その女性と別れた。旅のささやかな出会いではあるが、それぞれに温かい思いを分けていただき、素晴らしい旅の始まりとなったことに改めて感謝したい。

飛行機を降り、乗り継ぎの手続きをする。掲示板を見て、ゲートを確認し、矢印に従って進んでいくと、まずは手荷物検査。実は、手荷物で履き替えるための靴を持っていたのだが、その靴に乾燥剤を入れていた。これが引っ掛かった。確かに、怪しい袋。にっこり笑ってごまかす訳にもいかず、とにかく説明して事なきを得る。「これは何だ！」と詰問調で訪ねられた瞬間は、全身汗だくになった。今だから、笑い話だが・・・。

手荷物検査の次は、入国審査を受ける。EUシュテゲン条約というのがあり、この条約国への乗り継ぎの際は、ここヘルシンキ・ヴァンター国際空港内で入国審査を済ませることで、最終目的地での審査が不要となる。これがまた、何とも助かる。到着地での入国審査の列に並ばずに済むので、到着後、スムーズに移動することができる。乗り継ぎの際は、待ち時間があるので、審査に時間がかかっても問題ない。時間を有効に活用できるのだから、旅行者にとっては、たいへん有り難いといえる。

ただ、入国審査官というのは、どこの国でも強面の人が多い。本人はそう思っていないだろうが、仕事柄、目つきが鋭くなるのだろう。ヘルシンキでも多分にもれず、強面の審査官が隔てられたクリアガラスの向こうで、何やら質問している。その雰囲気に、怖気づく。先に家内が審査に向かうと、何か尋ねられている。笑顔は少なく、その様子にさらにドキドキしつつ、「次！」と

呼ばれ向かうと、夫婦ということが分かったのか、何も尋ねず顔だけ見てパス。文字どおり、「顔パス」だ。家内のお陰と喜んで、ゲートを出ると、悲愴な表情でわたしを迎え、「怖かった・・・」と。「今度から、先に行ってもらうから！」と文句を言われつつ、ついつい笑ってしまう悪いわたし。これもまた、旅の楽しみだ。

ヘルシンキ・ヴァンター国際空港は、そんなに大きな空港ではなく、コンパクトだ。分かりやすく、とても良い。北欧の雰囲気が漂い、「ムーミングッズ」などを置いた店もあり、見ている間に待ち時間もすぐ過ぎる。ベンチに腰を下ろすと、財布が・・・。誰かの忘れ物らしく、近くのインフォメーションで人を呼ぶ。初め、手に取って持って行こうとしたが、疑われても言いようがないので、来てもらうことにした。これも、家内が呼びに行き、大活躍だ。持主は、無事に見つかったのだろうか。

ヘルシンキ・ヴァンター国際空港の出発時間は、午後 5 時（現地時間）。あと 1 時間足らずという頃、出発ゲート 31-D へ向かい、搭乗手続きを済ませ、機内への案内を待つ。大学生くらいの日本人女性がわたしたちのそばに、不安そうに佇んでいた。声をかけると、これから語学留学で、ドイツへ行くとのこと。素晴らしい！そして、うらやましい！あの彼女、今ごろ、頑張っているのだろうか。

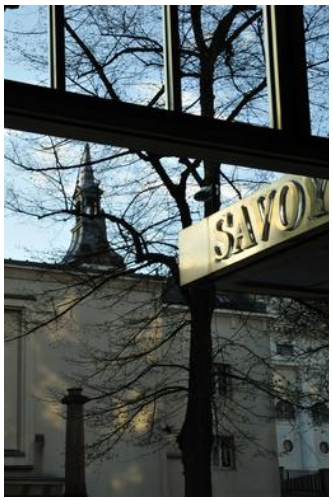
ほどなく搭乗のため、バスで移動し、タラップを登り機内へ入る。ヘルシンキは、少し肌寒かった。冷たい空気を胸いっぱいに吸い込み、いよいよベルリンへ足を運ぶ。定刻の午後 5 時を少し回り、離陸。ベルリンまでの機体は、エンブラエル 190 という小型ジェット機で、全て 2 人掛けのシートが 25 列、つまり 100 人乗りだ。座席の幅もゆったり目で、小さいながらたいへん快適だった。所要時間は、およそ 2 時間。神戸から札幌までのフライトより短い。安定飛行に入ると、すぐ軽食が配られ、飲み物を尋ねられた。「Coffee, please！」と言ったのだが、勘違いかリンゴジュースが出てきた。そんなに発音が悪いの？不安がよぎる。

気がつくと、もう着陸態勢。やって来た、ベルリンだ。徐々に見えてくる景色は、ヘルシンキのそれとは違っていた。ほんの 2 時間ほどだが、こんなにも違うものなのだと思う。バスで移動し、預けた荷物を受け取る。荷物が出てくるのを待っていると、隣にいた女性から声をかけられた。「日本人ですか？」その女性も日本人だ。ご主人が、ベルギーにお住まいとのことで、旅行を兼ねベルリンで待ち合わせ、家に向かうそうだ。今回の旅では、国際的な家族が意外と多いことに驚かされる。無事に荷物を受け取り、ベルリンの市街地へ向かうバス乗り場へ。先ほども書いたが、ヘルシンキで手続きが完了しているので、国内線扱いなのだ。荷物を受け取れば、何の検査もせずに、空港を後にできる。

ホテルは、ツォーロジッシャーガルテン駅（以下、「ツォー駅」と表記。）から徒歩 5 分ほどの「サヴォイ・ベルリン」。空港からツォー駅までは、快速バスなら 15 分ほど。わたしたちが乗ったのは、通常の路線バスで 25 分ほどかかったが、クーダム―旧西ドイツ時代のメインストリートがある地区を通り、ツォー駅へ向かうため、少しベルリンの町を見ることができ、翌日の観光の下見にもなった。看板や標識など、目に入ってくる全てのものが新鮮で面白い。時刻は、午後 6 時（現地時間。以下、時刻表記はドイツ時間。）というのに、外はまだまだ明るく、日中と言ってもおかしくない。緯度が高いので、日が長いのだ。

少し迷ったがホテルに着き、無事チェックインを済ませ、少し付近を散策し、あわせて食事を買うために外に出る。疲れていたので、軽く食べるものを買ってホテルに戻り食べる。さ、明日からいよいよドイツ観光の始まりだ。

［2 日目（2012.4.22）］　初めてのベルリン。そして、ポツダム・・・



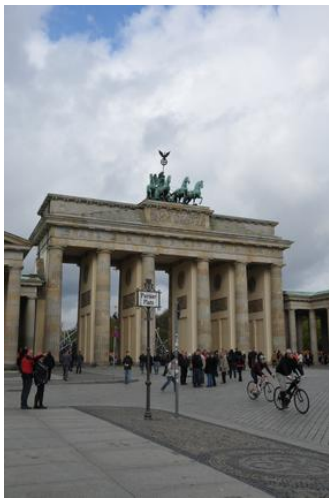
　ぐっすり眠り、午前 6 時すぎに目が覚める。外から、小鳥のさえずりが聞こえてくる。日本では聞かない声だ。身支度をし、朝食会場のレストランへ行くと、フィンランドから来た団体旅行客の 2 人の高齢の男性と女性が、別の席に座り食事をしていた。赤で統一された格調高い雰囲気に圧倒されたが、ウェイターに「Guten Morgen！（グーテン・モルゲン、おはよう！）」と声をかけ、席に着く。たくさんの種類のパン、ハム、チーズ、フルーツ、サラダが用意されていて、何を食べるか迷う。どれも、たいへん美味しく、ゆったりと朝のひと時を過ごすことができた。

　お腹も満たされ、日本ならもうひと眠りするところだが、せっかくドイツまで来たのだから、そうはいかない。陽ざしはあったが、肌寒く、少し暖かい格好をして出かけることにした。まずは、ドイツ連邦議会議事堂（Reichstag,Deutscher Bundestag）を目指す。

　昨日、降り立ったツォー駅前からベルリン市内の主な観光地を巡るバスが発着しており、議事堂前を通る 100 番のバスに乗る。バスは、15 分から 20 分おきにあるので、たいへん便利だ。そして、黄色い車体で 2 階建てなのだ。その前に、切符を買わなくてはいけない。自動券売機で苦戦しながら、1 日乗車券を買う。区域制料金で、AB 区域の 1 回乗車券が 2.30 ユーロ。1 日乗車券が 6.30 ユーロ。この区間を買っておけば、ベルリン市内のおよその場所は周れる。わたしたちは、時間があれば、ポツダムまで足を延ばしたかったので、ABC 区域で利用できる 1 日乗車券（6.80 ユーロ）を買うことにした。買っていると、酔っ払いのおじさんが、案内の表示方法や、切符の使い方を親切に教えてくれた。「日本語で別れの挨拶は何というのか？」とドイツ語で尋ねられ、「『さようなら！』だよ。」と言うと、「さようなら～」と言いながら、駅へと向かったが、無事に帰れたのだろうか。朝から酔っているって、さすがベルリン？！こんな形だが、ドイツ語で会話が交せ、少し嬉しかった。そして、おじさんの親切な気持ちも嬉しく思った。

　午前 9 時 15 分、ツォー駅からバスを使い 15 分ほどで議事堂前に到着。大きな建物だ。日本の国会議事堂も立派だが、重厚な石造りからは、ヨーロッパ・ドイツの伝統を感じる。ドイツ国旗が風に揺られ、わたしたちの訪問を歓迎しているかのようだ。内部の見学もできるが、手荷物検査などを受け、50 分くらいの見学時間が要る。ここだけで時間をかけるのももったいないので、外観を堪能し、次の目的地へ向かう。ここからは、ベルリンの名所・ブランデンブルク門から東に延びるウンター・デン・リンデンという目抜き通りを進み、テレビ塔のあるアレキサンダー広場まで歩いて散策する予定だ。およそ 2 キロ。ゆっくり見ながら、歩いて 1 時間といったところだ。ベルリンの中心部にあたることから、「ミッテ（Mitte）地区」と呼ばれている。

　議事堂から、ブランデンブルク門（Brandenburger Tür）までは、すぐだ。裏手に当たるが、そこの広場では、何か模様し物があるのか準備で大忙しといった感じだった。門をくぐると、広場があり、たくさんの人が見に来ていた。とても立派な門で、1788 から 91 年にプロイセン王国の凱旋門として、アテネの神殿の門を模して建てられたという。東西分裂時代（これが、わずか 20 年前の出来事なのだから、驚く。）は、この近くに壁が設けられていたので、門をくぐることは出来なかったらしい。



後で、詳しく書くつもりだが、ベルリンを歩くと、東西分裂時代の跡を嫌でも感じ、知ることができる。町が、歴史と向き合っているということだと思う。わたしは、とても大切なことだと感じた。

ブランデンブルク門のその規模に圧倒されつつ、その場を離れがたい気持ちを抑え、ウンター・デン・リンデン（Unter den Linden）を行く。Linden というのは、「菩提樹」のことで、ドイツを代表する樹木の一つと言える。菩提樹の並木道が続く道なので、この名で呼ばれ親しまれているのだろう。

しばらく歩くと、お土産屋があり、ふと見上げると、「Komische Oper（コーミッショ・オペラ)」と書かれていた。ベルリンにある大きなオペラ劇場の一つで、行ってみたいな、と思っていたところだ。ほとんどのオペラをドイツ語で上演し、モダンな演出で楽しませてくれるのが、ここコーミッショの魅力だ。ほんのすぐ隣には、フォルクス・ワーゲン社の建物があり、こちらの方が目を引く。この向かいには、メルセデス・ベンツ社があり、車関連会社が軒を連ねている。「国産車」なのだから、当たり前と言えばそれまでだが、ドイツに居ると、普通に「ベンツ」が走っている。タクシーもバスも、もちろん自家用車も。そして、ドロドロだ！何故か微笑ましく思える。

さらに進むと、左手にフンボルト大学が見えてくる。森鴎外や北里柴三郎といった人たちもここで学んだのだ。鴎外は、ここから少し離れたところで下宿しており、鴎外記念館として現存している。さて、このフンボルト大学の前に、ベルリン国立歌劇場（Staatsoper）がある。ただ、現在、改修中でその全容を見ることは出来なかった。世界的指揮者ダニエル・バレンボイムが音楽監督を務めるオペラ劇場で、来日公演も行われており、有名な歌劇場の一つだ。本場の音を、本場で聴いてみたいものだ。

少し行くと、シュプレー川（Spree）から流れを分かれちょうど中州のような形で島が出来ている。ここに博物館が密集しているので、「博物館の島（Museumsinsel)」と呼ばれている。その西側に架かるシュロス橋を渡ると、ベルリン大聖堂が見えてくる。このシュロス橋から川沿いを北に進むと、ミッテ地区の中心となるフリードリッヒ・シュトラッセ駅があり、そこまでの間にベルリン名物・蚤の市（Flohmarkt）の一つ「アート＆ノスタルジーマーケット」が土曜日と日曜日には開かれており、ちょうど訪ねた日は日曜日だったので、市が開催されていた。手作りの品や絵画、東ドイツ時代の品々が並び、見ているだけでも楽しい。

蚤の市を見て、博物館島へ渡ると、楽器を演奏している人がいた。その調べを聴きながら、ベルリン大聖堂へと戻る。大聖堂は、その名のとおり高さ 114 メートルもある青銅色の大天蓋と重厚な石造りの建物が目をひく。この大天蓋、第 2 次世界大戦で大きな被害を受け、1993 年に修復されたとのことだ。こういう形で復元されているところが、ドイツ的というか、町並みの調和がとれている所以なのかもしれない。入口がガラス張りの車関連企業の建物があったり、大聖堂があったり、歌劇場があったりと形は様々なのだが、不思議と雑多な印象を受けない。

大聖堂をぐるりと見て周り、島の東側に出ると、シュプレー川の観光船乗り場がある。そして、その近くに DDR 博物館の入口がある。DDR とは、東ドイツの略称で、東ドイツ時代の様々な品が展示されている博物館だ。中に入ろうかと思ったが、どうも博物館は苦手だったので、写真だけ撮り、近くの喫茶店で少し休憩することにした。

余談だが、ベルリン大聖堂の道を隔てた向かいに、ガラス張りの現代的なフンボルト大学博物館がある。図書館にもなっているようだった。

コーヒーとパイを食べ、歩き疲れた足を休め、再びアレキサンダー・プラッツ駅を目指す。このカフェの隣に、「アンペルマンギャラリー」があったので、立ち寄る。ちなみに、「アンペルマン(Ampelmann)」とは、信号機のランプの中に描かれている男の子のことだ。旧東ドイツ時代の信号機のデザインで、失われていく東ドイツ文化を惜しむ声からグッズが生まれたという。確かに、愛らしい。記念に、わたしたちも幾つかの品を購入した。

テレビ塔を目印に、そちらへ向かう途中、路面電車の線路を渡ると、教会がある。マリエン教会だ。ベルリンでは、ニコライ教会の方が有名だが、こちらも趣のある教会で、日曜日のお昼前だったので、ミサが開かれており、中には入れなかった。1270 年の建造というからその歴史の重みが、建物からもにじみでていたのだろう。

このマリエン教会の裏手というか、東側にそびえ立つのが、「テレビ塔」だ。ベルリンの中で最も高い建造物で、高さ 365 メートル。モダンな塔なので、少し違和感もあるが、一つくらいはこういうものもないと面白くない。展望台からの眺めが良いそうですが、ここも外観のみ楽しむことに。

午前 11 時 40 分、アレキサンダー・プラッツ駅に到着。およそ 2 時間、のんびり見て歩いてきた。十分に時間があるので、ここからポツダム（Potsdam）へ向かうことにする。S バーン（近郊列車）で 1 時間程度だ。路線図と時刻表を見たが、良く分からなかったので、とりあえず来た列車に飛び乗る。車内で引き続き確認していると、ナウエン（Nauen)行きで、全く違うことが分かり、次の停車駅ベルリン中央駅で下車。S バーンのホームに行くと、Potsdam という表示があり、それに乗る。午後 12 時、えんじ色とおうど色の車体の S バーンが入線、車内に乗り込む。ドイツの鉄道は、自転車を乗せることのできる車両があり、そういうお客さんの優先車両となるのか、マークが付いている。

ゆっくり進む近郊列車 S バーンに揺られ、ポツダムへ向かう。車窓から見るドイツの景色も、また楽しい。ホテルのあるツォー駅にも停車し、最終日にお世話になるホテルの最寄り駅、シャルロッテン・ブルク駅を出、しばらくすると〇〇Wald と「森」という名のつく駅だ。その名のとおり、緑の生い茂ったのどかな風景が広がる。次の駅は、「Nikolassee(ニコラスゼー)」で、「see(ゼー)」というのは「湖」という意味で、湖のほとりなのだろう。その次の駅が、「Wannsee（ヴァンゼー)」で、こちらも「see」なので、よほど大きな湖があるのかと思っていたら、その湖が姿を現す。少し町から離れると、こんな風景が広がるということにも驚かされる。この Wannsee は、ベルリンの南西部に当たり、鉄道の切符の B 区域の端となる。次の駅は、C 区域だ。地域が変わるためか、他から来る路線の終着駅ともなっているようで、乗り換えの客がわたしたちの乗っている列車にも乗り込んできた。

午後 12 時 45 分、ポツダム中央駅に到着。駅名表札の上に、「Herzlich Willkommen in Potsdam!」と表示されていた。世界遺産・サンスーシー宮殿のある玄関駅だ。大きなショッピングセンターも併設されており、とても綺麗で広々とした駅だった。西出口から出れば良かったのだが、来た出口に出てしまい、だだっ広い駐車場のある広場で、観光客らしき人がいない道を不安げに歩く。おかげで、ハーフェル川の遊

覧船を見ることができたので、これもまた良い。ハーフェル川を渡ると、ポツダム映画博物館が見えてくる。ドイツ映画の名作を生みだした会社が、ポツダム郊外にあったことから、博物館が作られたそうだ。ひとまず、サンスーシー宮殿を目指す。

フリードリヒ・エルベ通りを北進し、ブランデンブルク通りと交差したところで、ブランデンブルク通りを西進するのだが、東側を見ると教会が建っている。プロップシュタイ教会（Propsteikirche）という教会だが、ガイドブックには掲載されていない。せっかくなので、ここで写真を掲載しておこう。旅行記なので、あまり写真を載せないつもりだったが、書いていると、ついつい増えてしまう。

このように寄り道をしながら、ブランデンブルク通りに戻るが、ポツダムの繁華街だけあり、人通りも多く、色んなお店があり楽しめる。オープンカフェでお茶を飲んだり、中には、ビールジョッキを片手に語らい、高々な笑い声が通りを包み、賑やかな印象を与えてくれる。この通りの突き当たりに、ベルリンと同じ「ブランデブルク門」がある。この門の方が、ベルリンよりも古く 1770 年の建設。ローマの凱旋門を模して検問所の役目だったそうだが、規模は小さくベルリンのものとは比べ物にならない。

ここから少し小道に入ると、サンスーシー宮殿のあるサンスーシー公園の入口が見えてくる。木立が門扉を覆い、自然豊かな庭園や立派な宮殿に期待が膨らむ。ここ「サンスーシー公園（Park Sanssouci）」は、世界遺産として認定されており、多くの宮殿と庭園がある。その広さは、約 3 平方キロメートル。東西の長さが、2.35 キロメートルある。この広大さは、後で知るのだが、ひとまず見所の「サンスーシー宮殿（Schloss Sanssouci）」を目指す。ちなみに、「サンスーシー」とは、中国語の数字「3」「4」・・・ではなく、フランス語で「憂いなし」という意味。ヨーロッパ列強との戦いに疲れたプロイセン王フリードリヒ 2 世が、憂いのない場所を求めて建てた夏の避暑地だ。その贅の極みが、ここに集まっているともいえる。

その歴史を感じながら、一歩一歩踏みしめて、公園内を歩く。ぶどう棚を配した階段を登ると、大きな黄色いサンスーシー宮殿が現れる。「黄色」というと、派手な印象を受けるが、周りに在る緑ととても調和していて、「美しい」という言葉が良く似合う。日本で、こんな色の建物を見かけると違和感を覚えるのは、何故だろう。その美しい様にうっとりしながら、後ろを振り返ると、ポツダム

の町が一望できる。その広がり―眺望の素晴らしさは、言葉では表しきれない。

余談だが、ドイツ(他のヨーロッパ諸国もそうかもしれないが)は、たいていこういう施設の内部を見学するのはガイドツアーで周ることになっていて、1 時間くらいは見ておかなければいけない。英語でもドイツ語でも、良く理解出来るならいいのだが・・・。ただ、「きちんと見て欲しい」「しっかり知って欲しい」という気持ちからそうしているのか、管理という観点からそうしているのか、いずれにせよ少し窮屈さを感じないこともない。時間の都合、内部の見学は省略した。余談ついでに、ドイツを旅して感じたことの一つに、公衆トイレが少ない。日本が多すぎるのかもしれないが、そして、あったとしてもほとんどの場合、お金が要る。50 セント程度だが、持っていないと困る。ここでも、お金を支払って、用を足した。我慢しようと思ったが、実はこの後、ここで用を足しておいて、良かったと思うのだ。

宮殿をあとに、歴史的風車を見ていると、馬車が横切って行った。何とも良い雰囲気を醸し出してくれる。で、ポツダムの市街地へ戻ろうと、公園内の中心通りハウプトアレー（Hauptallee）へ。ずっと西の方に、趣のある宮殿が見える。ここまで来たのだから、行ってみようと軽い気持ちで、その宮殿（新宮殿）へ向かった。が、先ほども書いたとおり、サンスーシー公園の東西は、2.35 キロメートル。入口からだいたい 3 分の 1 程度の所だったので、新宮殿までは、約 1.5 キロメートルあり、入口からこのハウプトアレーを往復するだけで、5 キロメートル近くの距離ということになる。この時は、この距離を知らなかったので、何も考えずに新宮殿を目指した。意外と近くにあるように感じたのだが、辺りに遮るものがなく、真っすぐに伸びる道が目に錯覚を与えたのだろうか。他の観光客たちも、ぶらぶら歩いていたので、たいへんなことが待ち受けているとは思いもよらなかった。

歩けども、一向に新宮殿にはたどり着かず、引き返すにしても同じ距離、あるいはそれ以上を歩く必要があり、途方に暮れ、とにかく近くにあったベンチに腰を下ろす。本当に、さっきの所で、50 セントをケチらずトイレに行って良かったと思う。こんなに距離があると思っていなかったので、新宮殿に寄ったあと、お昼も食べていなかったので、ブランデンブルク通りのカフェでお茶でもしようと思っていた。とてもそこまで戻る気にはなれなかった。助けも求められるわけもなく、とにかくそこまで歩くしかなかった。日本から持ってきたトッポ（チョコレートのお菓子）と水を口に含み、気力を振り絞って 2 人で歩いた。家内は、それほど疲れていなかったようだ。本当に、トイレに行っておいて良かった。そのことばかりが、頭に浮かんだ。

悲壮感漂う形相でたどり着いた新宮殿は、その規模に驚かされるとともに、建造物に施されている装飾の数々の素晴らしさに疲れも忘れてしまうほどだった。だから、遠くから見ても近くにあるように思うわけで、「すごい！」の一言に尽きる。

ひと通り、新宮殿をぐるりと見て、ここからどうやって帰るかの検討に入る。インフォメーションの地図を見ると、バス停が近くにあるようだが、麻痺していたのか、南に下ると鉄道の駅があるので、そこに向かうことにした。並木道を散歩しているご夫婦とすれ違ったり、途中にあるベンチで語り合う近所の人たちがいたり、観光地から少し離れた所だったので、地元の生活ぶりを見ることができた。何もないただの並木道だったが、不思議と「遺産」「名所」「名勝」といったものよりも、何気ない日常の光景の方が、意外と人の心をとらえるのかもしれない。10 分ほどで、ポツダム・パルク・サンスーシー（Potsdam Park Sanssouci）駅に到着。ポツダムから西に 2 駅。つまり、2 駅分、歩いたということだ。そりゃ、疲れるわけだ。ポツダム中央駅が起点となるので、この駅に停まる列車は少なく、1 時間に 1 本程度。仕方ない。こういう地元の人しか使わないであろう駅で、のんびり列車を待つのも、気ままな旅の楽しさでもある。

いかんせん、お腹がすいたので、プラットホームにある自動販売機で、お菓子を買うことにした。色んな種類のお菓子や飲み物が入っていて、どれを買うか迷いながら、お金を入れる。こういうことも、楽しい。穏やかな春の日差しが射すホームで、お菓子を頬張りながら、通過する列車を眺め、ここまでの旅を振り返る。しばらくすると、家族連れがやって来た。何とも微笑ましい。20 分ほど経った午後 3 時 40 分、RE（レギオナル・バーン）という地域間を結ぶ普通列車がやって着た。ポツダム中央駅行きだ。ドアを開け、席に着くと、向かいに仲良く老夫婦が座って

おられ、わたしたちが窓の外の景色に目をやっていると、小さな声で「こんにちは」と言って笑っていた。嬉しいふれ合いだ。

5 分ほどで、ポツダム中央駅に到着。歩けば・・・。駅のショッピングセンターを見てみることにした。本屋や電気屋、もちろんお土産売り場もある。その中でも茶葉を売っている店に入り、自宅用のお土産に買う。

午後 4 時 10 分発の S バーンで、ツォー駅へ戻る。

ポツダムは小さな町だが、とても魅力的な町だ。1 日かけて、ゆっくりと散策すると、本当に楽しいかもしれない。今回、立ち寄らなかったが、北東方面には、1945 年ドイツの戦後処理について開かれたポツダム会議の場となった「ツェツィーロエンホーフ宮殿」やオランダ人街などもあり、見所もたくさんある。バスや鉄道を利用し、有効に周ると良いのだろう。わたしのように思いつきでやってくると、少しシンドイ目に合うかもしれない。ま、それも旅の記憶となり、笑い話の一つとなるのだが・・・。

午後 4 時 40 分、ツォー駅到着。少しずつ傾く陽ざしを受けながら、30 分ほどの列車の旅。時間を気にせず、のんびりとドイツの町を堪能できた。やはり歩き疲れたこともあり、ひとまずホテルに戻り休憩した後、夕食に出かけた。レストランへ行く元気がなかったので、駅のインビス（軽食）に立ち寄り、ベルリン名物の「カレーブルスト」を食べる。まずまず。ビールを飲むのを忘れていたので、おつまみとビールを駅の売店（KIOSK）で買い、ホテルで小宴会。明日は、ベルリンを離れ、ライプチヒへ向かう。まだ、ドイツの旅は続く。

もう少し、ベルリン市内を見たかったが、最終日に戻ってくるので、それまでお預けだ。ベルリン市内は、大きく見所もたくさんあるので、的を絞って周らないと、とてもじゃないが周りきれない。そして、残念ながら、オペラ鑑賞には行けなかった。これで、次回の旅の目標が出来たと考えることにしよう。